

## 2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

### 松縄程朗 「日本におけるコミュニティ金融」

コミュニティ金融というテーマは、古くて新しい問題のように思われます。

日本では明治以前、各地域に「頼母子講」や「講」と呼ばれる自治組織があって、庶民がお金を融通し合っていました。

戦後、地域の中小零細業者がお金を借りるのに困って、協同組織の金融機関として信用組合や信用金庫が各地に設立されていきました。しかし、これらの金融機関は法制度や行政指導により、次第に一般の銀行とあまり変わらなくなってしまいました。1990年代には金融危機と貸し渋り・貸しはがしが起き、庶民にとって金融機関の存在意義はいったい何かということが根本的に問われるようになりました。

2000年代以降、地域格差が激しくなり、過疎地から大都市へと富が集中するなかで、地域の中でお金を循環させるコミュニティ金融の重要性が、いま改めて注目されています。金融庁の打ち出したリレーションシップバンキング政策、金融機関の地域密着型金融計画なども、その一つの証左と言えます。

松縄さんは地域経済の発展にとってコミュニティ金融は極めて重要だと考え、このテーマを選びました。特に注目したのはコミュニティ金融の担い手となる金融機関です。こうした重要な課題に注目したことは、大変高く評価できます。

もともと担い手として発足した信用金庫や信用組合、農協系金融機関はきちんとコミュニティ金融の機能を果たしているのでしょうか。松縄さんは出身地・新潟県の金融機関の現状を一つ一つ調べていきました。

本論文においては、現地調査やインタビューなどではなく文献調査の範囲にとどまっているので、現状分析には限界もありますが、よく努力していると思います。

この論文を書く過程で、コミュニティ金融はどうあるべきか、いろいろと考えさせられたそうです。

松縄さんは卒業後、出身地の金融機関に就職する予定です。論文を通して得た問題意識を、これからも持ち続け、いずれは実践にもつながることを期待しています。